

慈教堂古墳発掘調査報告書

友部町教育委員会

慈教堂古墳発掘調査会

序

友部町には、多くの遺跡があり、先人達がこの地に生活を営んだ貴重な文化財も多く存在しています。

これらの文化財を後世に伝えることは、私たちの責務と考え、対応に努力しているところです。

このたび、友部町史編さん事業の一環として、慈救堂古墳の発掘調査を行いました。潤沼川流域に存在する古墳、遺跡の性格について知る資料として、手がかりが得られた。

慈救堂古墳発掘調査および、調査報告書作成にご指導いただいた町史編さん専門委員、調査委員の皆様ならびに関係各位に、心から感謝申しあげます。

平成2年3月12日

友部町教育委員会教育長

宮山茂夫

目 次

序	
例 言	
はじめに	1
慈教堂古墳の発見とその経過	2
慈教堂古墳の位置	3
古墳の発掘	5
石室の発掘及び形態	5
考 察	7
1. 県内の方墳	7
2. 発掘調査された方墳	7
(1) 吉田古墳	7
(2) 土浦市鳥山古墳群	8
A 石倉山古墳群	8
第8号古墳	8
第9号古墳	9
B 西方地区の古墳	9
第1号古墳	10
第2号古墳	10
(3) 土浦市永国寺家の後・十三塚B遺跡	11
慈教堂古墳の復元	12

挿図目次

図 1	古墳位置図	14
図 2	慈教堂古墳付近の古墳とその他の遺跡（友部町遺跡分布図）	15
図 3	慈教堂古墳実測図 (1)	16
	墳丘断面図 (2)	17
	墳丘および周堀断面図 (3)	18
	周堀断面図 (4)	19
図 4	石棺実測図	20
図 5	古墳出土・甕実測図	21
図 6	県内方墳分布図	22
図 7	吉田古墳実測図	23
図 8	鳥山古墳位置図（石倉山）	24
図 9	同第 8 号古墳実測図	25
図 10	同第 9 号古墳実測図	26
図 11	西方地区の古墳・第 1 号古墳実測図及び土器実測図	27
図 12	同第 2 号古墳実測図及び土器実測図	28
図 13	土浦市永国・寺家の後第 2 号古墳実測図	29
図 14	慈教堂古墳復元実測図	29
図 15	「新編常陸國誌」所収・延喜年間の図	30

写真目次

図版 1	発掘前の慈教堂古墳全景	31
図版 2	発掘中の墳丘	32
図版 3	発掘中の墳丘及び堀の断面	33
図版 4	発掘後の石棺全景	34
図版 5	発掘後の石棺全景	35
図版 6	古田古墳全景	36
図版 7	古墳出土・須恵器甕	37
図版 8	須恵器甕・慈教堂古墳復元全景	38

註解

- 註1 西茨城郡友部町教育委員会「高寺2号墳」1976. 3
- 註2 諸訪山古墳発掘調査会「諸訪山古墳」昭和55年
- 註3 大森信英・高根信和「茨城県東茨城郡茨城町ドンドン塚古墳発掘調査報告」
上代文化 37 昭和42年
- 註4 慈教堂古墳発掘中、地元居住の上野清彦・野口栄治・赤津長緒氏等の教示による。

例言

1. 本報告書は昭和63年11月から同年12月まで実施した茨城県西茨城郡友部町大字長兎路字慈教堂所在の慈教堂古墳の発掘調査報告書である。
2. 報告書の執筆、写真の撮影、発掘調査の指揮は大森信英が当たったが、実測図の作成は元茨城県住宅供給公社建設部次長菅谷敬氏、実測図のトレース、遺物の写真等は茨城県立歴史館学芸部第一室長 高根信和氏、同主任研究員 真吹堅氏の手を煩わした。
3. 調査に当っては友部町教育委員会の飯島事務局長、横田係長、枝川朴教主事、磯主事、町史編さん委員 小谷清治氏、町史編さん事務局 松岡主事、社会教育指導員 新宍陽子氏、地主 上野清彦氏、同主 赤津長緒氏の協力と援助を受けた。
4. 作業に協力を得た方々は下記の通りである。厚く感謝の意を表したい。
また、本古墳の発掘調査の目的が淀沼川流域下流域の古墳文化の性格を知る一助として行なったことから町史編さん監修者の鈴木咲一氏、村上副雄前教育長、宮山茂夫教育長、村上浩之助町長に感謝する。

協力作業員

上野清彦 野口栄治
井野信夫 野口貢

はじめに

町史編さん事業を手伝うようになって、大変困ったことは、一部の保管資料を除いて町に保存されている資料は皆無に等しく、広報紙による町民への呼びかけでもほとんど反応がなかったことである。

このようなことではほ1年が過ぎようとしており、あせりが出はじめた。3年で完結するためには資料の蒐集は1年で完了すべきで、2年目には執筆を開始しなければ3年完結には間に合わないのである。

そこで、町内全域の遺跡の再確認と分布調査による遺物の蒐集を合せ行うことにして、また間に合えば発掘調査も実施したいと考えたのである。

分布調査は、ほぼ半年かけて精力的に実施し、多大の成果を得たが、発掘調査については遺跡の選定、種別、調査費用及び町史編さん上最も資料の稀薄な箇所等を考慮に入れて検討したが、結局古墳を発掘することとした。

調査の的を古墳にしばったのは、東に隣接する内原町までは発掘例がかなりあって何とか古墳時代の文化の様相を知り得るが、内原町から西の石岡市に接する友部町と岩間町の二町については報告例がなく、その性格もわかっていないからである。

もっとも、本町には緊急調査による古墳の発掘は2例ある。1つは高寺2号古墳^{#1}であり、他の1つは諏訪山古墳^{#2}である。

本町内を貫流する潤沼川流域では上流に諏訪山古墳があり、下流では茨城町出兵沢にドンドン塚古墳^{#3}があって、古墳が全くないわけではないが、中流域には発掘例はない。今回の分布調査では大古山地区鳴田氏宅内の巨大な横穴式石室材、高寺の石棺、善九郎古墳、仁古田の石棺蓋等々、煙滅した古墳はかなりあるが、それらからの反応は僅かでしかない。

このような中で1年はあっという間に経過してしまい、リミットにも近づきつつあった。

慈教堂古墳のことが耳に入ってきたのはこの時であった。

慈教堂古墳についていろいろ調べてみると、現在までに4～5回掘られているらしいが、それは多分に地元の方々が興味本意を行ったらしいことで、それが仮に遺物を目的にしたものであって、その際遺構を破壊したとしても、石室のすべてが失なわれた訳でもないので、遺構の一部さえ確認できれば、幸いであると考え、発掘調査を断行したのである。

慈教堂古墳発見とその経過

発見の経過をこの古墳を含めた開墾事業に従事した赤津長一郎氏の記録から抜粋すれば下記のようになる。

昭和9年1月20日（1934）

長兎路更生農業実行組合を結成し、上野茂男氏所有山林（長兎路字慈教堂777）5反歩を共同開墾する。

代表 赤津長一郎 10名の組合員上野藤一郎、赤津国衛、上野清憲、上野兼吉、赤津要之助、野口善博、打越菊治、上野安重、赤津俊満、赤津長一郎

昭和9年2月5日

上野安重、赤津国衛両名が開墾作業中開墳地の東南にあった塚の下から古代の石棺らしいものを発掘した。素焼きの土器、その他出土、年代不詳

昭和9年2月20日

石棺を復元、祠を設け、井東神官により農神を祭り、慈教堂稻荷とし、毎年この日を祭日とし、お田植祭を行う。

昭和10年10月12日（1935）

慈教堂稻荷の神殿を造営する。（材料は赤津長治郎氏寄附。大工は赤津要之助氏奉仕）昭和19年まで奉仕。

である。上野清彦氏の話では祭日には出店が出て賑いを見せたということである。

さて、2月5日に発見され、その石室内部から素焼きの土器、その他の遺物が出土した由であるが、当時の事情を知る方々の話を総合すると、石室から発見されたその他の遺物とは鏡、直刀、土器等で、それらの遺物の一部は後で北川根小学校に保管されたと伝えられている¹⁴。現在同校にはそれらしい遺物はなく、別に上野清彦氏が「御神体」として祠に納めた土器2個分が保存されている。

この土器は共に土師器で、1個は口縁部の完全な頸部までの破片で広口壺と思われ、他の破片は胴部から底部にかけての破片である。

前者は「ろくろ」成型のうえ、さらに笠修正の見られる美しい土器で、後者はそれに比して粗雑な破片である。胎土に粗い粒状が目立つ。色は共に黄褐色を呈している。

また、昭和10年1月、赤津長治郎氏等によって神殿が建てられ、「慈教堂稻荷」として昭

和19年まで毎年祭りが行われたと書いたが、発掘の時点では神殿ではなく、石造の小祠と灯籠1基が存在しただけで、付近に五輪塔の宝珠、九輪等数個、「えな壇」等がおかれていたにすぎない。

発掘前の古墳の形状

今回の発掘に先立ち実測した結果は、東西径4メートル、南北径5メートル、高さ1メートルの楕円形の古墳で、東北—南西にやや長い。南墳丘麓には石室の一部が露出しているが、何時頃露出していたかは詳でない。今回発掘を手伝われた方々は、いつ頃かは定かではないが子供の頃というから30年くらい前か。(40~50代の方々)一昭和30年代か、一石室南側から入って遊んだと言っておられたことと、4~5回発掘したとも伝えているし、また、かなり永い間石室が露出していたらしく、通りすがりに見たという人もいるし、また、道路側からは見えなかったという人もいる。

墳丘上及び封土内からは築造時のハニワ、葺石等の遺物は全く発見されていない。墳丘の立地する現表土高は28.6メートルである。

慈教堂古墳の位置

慈教堂古墳は行政的には西茨城郡友部町大字長兎路字慈教堂777番地の2,11に所在する。友部町の東南部に位置し、常磐線友部駅の東南方約5.5km、常磐自動車道友部サービスエリアの南西方約0.6kmの地点にある。

古墳の付近には西南方300mのところに北川根小学校があり、また東南方200mの地点には二所神社がある。

古墳の付近は平坦な畑地と栗林で、標高は古墳の位置する大地はほぼ平坦で、畑地や栗林となっており、標高28メートル前後の洪積台地で、南方約1.0キロメートルに芝沼川が南北に流れている。(第1図)

慈教堂付近の古墳とその他の遺跡

本墳は茨城県遺跡地名表及び友部町文化財地名表には芝沼古墳群に属するが、この慈教堂古墳を中心として考えれば、この古墳は大きく3つのグループに別けることが出来よう。

第1のグループは古墳群の最西端に位置する古墳、即ち慈教堂古墳の属する1群で、現

在は本墳のみが残っているが、かつては3基が存在したという。1基は西方約30メートル、同番地内に1基、さらに同番地の南西端に1基と計2基の古墳が一直線上に、東西方向に存在したといわれている。昭和9年（1934）の開墾によって消滅したが、関係者の話によれば直径20メートルないし30メートル、高さ3メートル前後の古墳であったらしい。

遺物や遺構は全く発見されなかったという。

第2のグループは常磐自動車道のサービスエリアわきの公園（長兎路いこいの広場）付近による古墳群である。地名は字東原である。

このグループに属する古墳は約10基前後あったと考えられるが、字東原の人家、矢口正氏宅と「長兎路いこいの広場」と道路に挟まれた雑木林中に2基の円墳が現存する。慈教堂古墳の北東約300メートルに位置する。

直径8~9メートル、高さ1.0~2.4メートルの古墳で、周堀が認められる。周堀の巾は約1.5メートル、深さは1.0メートル、両墳の距離は両古墳の墳頂の中心間で12メートル、両墳丘裾からの距離で3.5メートルである。未発掘の古墳と思われる。

この古墳に隣接する「長兎路いこいの広場」内にも2基の古墳があったと伝えられている。1基は広場のほぼ中央部にあり、直径25メートル、高さ5メートル前後の円墳で、常磐自動車道建設の時点で焼滅したという。遺物、遺構等については何もわかっていない。

この他に常磐自動車道内に2~3基、自動車道の南、塔頭墓園の北側付近に1基、半墳状態の古墳が現存している。

第3のグループが古墳群名となった芝沼古墳群である。地名表には大字湯崎字芝沼1149の1、芝沼古墳群として記載されている古墳にあたるが、地番は湯崎、芝沼と長兎路明神裏とある。町道4081号線上に5基の古墳が道路を挟んで交互に同間隔で3基並び、町道2級9号線との交叉点に2基の古墳がある。

古墳間の距離は150メートルから170メートルであるが、農免道路と柏井通学道路の交叉点沿いにも2基の古墳があって、これを加えれば7基存在することになるが、この2基については確認できなかった。

この他隣接する大字仁古田地区でも西仁古田公民館北側の涸沼川を望む台地端にも入場塚といわれる東西9メートル、南北13メートル、高さ21メートルの古墳1基があり、東仁古田、於伊都岐神社北方畠の農道沿いにも石棺の蓋石が立てかけてあり、古墳が存在したことをうかがわせている。

慈教堂古墳の東南地域は涸沼川沿いに比較的平坦な台地が拓け、その台地には縄文時代

の遺跡をはじめ、弥生遺跡、古墳時代の包含地が連続して発見されるばかりでなく、潤沼川の対岸、岩間町安居には駅家が存在し、町内には安居の駅家から河内の駅家に通ずる五万堀には「街道跡」も確認されている。(第2図)

古 墳 の 発 掘

古墳の大きさを直径30メートル前後と推定し、残存墳丘の墳頂を中心に巾2メートル、長さ30メートルのトレンチを磁北に併行、直交するように十字に設定し、さらにその中间に米字型に同様のトレンチを設けて発掘したところ、現表土下0.4メートル付近でロームに到達した他、墳丘の中心からほぼ6メートル付近に巾1メートル前後の周堀を確認した。

また、この周堀は東北隅付近で丸味を帯びて交叉していることが判明したこと、本古墳が円墳ではなく方墳であることも確かとなつた。

このため南西側のトレンチを追ったところ、東北隅と同様のコーナーを発見し得た。

このことから本古墳は石室南小口の中央を基準にそれぞれ6メートルの付近に周堀を設けた1辺12メートル、周堀の上部の巾1.75メートル、堀底巾1.05メートル、深さ0.75メートルの逆台形の周堀をもつ方墳ないしは上円下方墳であることを知つたのである。

周堀内から発見された遺物は東側から東北隅のコーナーにかけて中世の五輪塔の宝珠及び須恵器1個体分だけである。

また、南側トレンチ内、北壁中央部に石室南小口に連なるラッパ状を呈する墓道のあることも確認できた。

墓道の周堀に接する巾は1.05メートルで、深さは1.0メートルで周堀底より若干高く、緩やかではあるが、石棺底からの周堀への排水を容易ならしめている。(第3図-1・2・3・4)

石室の発掘及び形態

石室は墳丘南麓に一部露出していた。墳丘を除いて発掘したところ、実測図に見られるように長軸を磁北に対して10度南西—東北にふれて當まれ、南側小口の壁中央を基準として方墳として設計されている。

石棺材は緑泥片岩の自然石を約1メートル四方に削り、北側を奥壁として1枚、東側壁3枚、西側壁として2枚、南小口は現時点として長さ0.7メートル、巾0.2メートル、厚さ

0.1メートル前後の板石4枚を用いて両側壁とH状に組合せ、蓋石には巾0.4メートル、長さ1.3メートル、厚さ0.1メートル前後の同質の石を南北側小口にのせ、中央には長さ0.6メートル、厚さ0.1メートル前後の扁平石1枚を、南端には長さ0.6メートル、巾0.3メートル、厚さ0.1メートル前後の扁平石を載せて石棺を覆っている。この組合せは発掘時の2月20日の日記（前述）によれば、「石棺を復元した云々」であるところから、一旦蓋石を完全に除去し、石棺内を発掘した後、復元の時点で蓋石を載せかえた可能性もあるが、「復元」という言葉からは旧状もこのようであったと思われる。

石棺の底には敷石はなく、地山に直接組立て、石棺の壁外は北、西両側とも掘方との間を0.3メートル前後とし、その空間に白色粘土を詰めて固定しているが、東側は北側の奥壁の一部を除いて粘土ではなく、南側小口は数度の発掘もあり、また、墓道との関わりあいによるものか粘土はない。

石棺の大きさは石棺外法で1.75メートル、巾は1.05メートル、深さ1.75メートルである。遺物は全く発見されなかった。

石棺から南側周堀の間に排水溝、墓道状の掘り方が発見されている。

石棺の掘り方の外壁は石棺南小口で周堀にかけて狭まり、周堀と石棺南小口の中間では巾0.35メートル、深さは1.05メートルで、石棺底との高低は、この位置で0.23メートルで僅かに低い。この墓道は周堀に近づくにつれて広がり、周堀との接点では巾1.05メートルとなっている。（第4図-（1）・（2））

周 堀

古墳埴丘龍をめぐって堀が設けられている。隅丸形の周堀で、上部の巾は1.70メートルから1.80メートル、逆台形を呈し堀底の巾は1.05メートル前後である。

遺 物

東側周堀中央から北側コーナーにかけて発見された。五輪塔の破片と壺の破片1個体分である。

出土遺物

石棺内から今回発見された副葬品はなく、遺物は周堀から出土した須恵器壺1個のみである。この壺は東北周堀コーナー部内法から東側周堀中央付近に発見されたものである。口径部の径22センチメートル、腹部の径32センチメートル、高さ34センチメートルの比較的大型の壺で、表面に同心円文を、内壁にタタキ目文を付している。黒色を呈する焼成のよい壺である。（第5図）

考 察

1. 県内の方墳

本県内で現在報告されている方墳数は96基である。行方郡が最も多く51基、次いで鹿島郡が33基で、その他の市郡は4基以下と極端に少ない。

行方・鹿島両郡のうち、市町村別では北浦村の29基が最も多く、次いで鉢田町の27基で、その次は潮来町、玉造町の各9基、牛堀町の4基、旭村の3基となり、大野村、鹿島町、神栖町の各1基となっている。

この96基については分布調査当時の外形上からの判断によるものが多く、未実測のものが大半であると考えられるため、円墳が長い年月のうちに^{自然}脅張されて方形に変形しているものもあり得ると思われる所以である。

一応ここでは地名表に従っておきたい。

この方墳の在り方であるが、いづれも1地域に集中して當まれてゐることは注目されよう。(第6図)

2. 発掘調査された方墳

(1) 吉田古墳

水戸市元吉田町に所在する国指定史跡である。水戸市街地の南方の台地上にあり、発掘調査の結果一边8メートル、高さ1.7メートル前後の方墳であることが明らかになった。

埋葬構造は南に開口する横穴式石室で、凝灰岩の切石をもって組立てられている。石室の大きさは全長3.42メートル、奥壁の巾1.39メートル、玄門部の巾1.02メートル、高さは1.67メートルで、奥壁は高さ1.67メートル、底部の巾1.38メートル、天井部で0.96メートルの一枚板石で、全面に武器、武具類を線彫りしている。側石は両側壁とも巾1.06~1.27メートル、高さ1.63メートル、厚さ0.4メートル前後の長方形の凝灰岩製の板石を3枚立かけて構成しているが、天井の蓋石は二枚あるだけである。玄門部は崩れて定かでないが、羨道部、周堀をもつ古墳である。

奥壁に描かれた武器、武具は韁、刀子、鉢、太刀等で、金環3、勾玉、鉄鎌數十本、

刀剣残欠等が発見され、装飾古墳として有名である。

周堀と羨道部との接続部は未発掘のため詳ではない。(第7図)

(2) 土浦市鳥山古墳群

昭和49年(1944)茨城県住宅供給公社の鳥山団地の造成に先立ち事前調査された古墳群である。この団地内の古墳群は石倉山古墳群に属する1群と、その北西方約500メートルの地点に発見された古墳群と2群にわけられる。特に重要なのは後者の古墳群である。(第8図)

A 石倉山古墳群

この地区に発見された古墳は6基であるが、その内訳は前方後円墳1基、方墳2基、内墳3基の都合6基から成立っている。前方後円墳1基は埴丘がなく、地表下に埋葬主体部と周濠のある古墳であった。

方墳は第8号古墳及び第9号古墳の2基で、石倉山古墳群中の最東南端、台地端上に営まれている。

すなわち、西方から東南方にかけて伸びる台地が南側に張り出すコーナーの部分にあり、雑木で覆われており、第8号古墳上には小祠がまつられている。

第8号古墳

南北の長さ16.7メートル、東西の巾10.25メートルで、周囲に堀をめぐらしている。墳の巾は上部で2.6メートル、底部で0.9メートル、深さ1.1メートルの逆台形をなし

ている。

石室は東西の中央線上、南周堀内側から4.33メートルの地点から7.5メートルにかけて長さ3.17メートル、巾2.5メートル、深さ1.2メートルの壠り方があり、その内部に長さ2.3メートル、東西の巾1.3メートル、高さ1.2メートル、厚さ0.1メートルの板石を組合せた堅穴式石室状の箱式石棺が置かれてあったが、石室の南側小口及び西側壁最南端の側壁石が抜かれてない。

石棺の底部には全面に礫を敷詰めてあったが、その下部は地山となっている。

この石棺の構造は、次の第9号古墳の石棺が、前室を有する複室構造の石棺であるのに対して单室構造であることは注意されよう。

石棺は東側壁3枚、西側壁3枚(内1枚欠)、小口各1枚の計8枚で組立てられているが、蓋石はなく、詳でない。石質は雲母片岩である。遺物はない。盗掘された

と考えられる。(第9図)

第9号古墳

第8号古墳の東側に接して営まれている。石倉山古墳群中の最東南端、台地端に位置している。

墳丘の大きさは、発掘前と発掘後とも第8号古墳とは同じく、南北16.2メートル、東西の巾11.5メートルで、墳丘裾外に上部の巾1.8メートル、底部の巾0.9メートル、深さ0.5メートル前後の逆台形状の周堀を廻らすことと第8号古墳と同様である。墳頂の標高は24メートルで、第8号古墳より0.5メートル低い。

墳丘の盛土はローム層、旧表土、黄褐色土層、現表土となっているが、西側の周堀付近ではローム層上に直接現表土が載り、旧表土はなく層の厚さも0.2メートルにすぎない。

さて、埋葬主体であるが、掘り方は第8号古墳の掘り方が長方形を呈するのに対して、正方形に近く、南北の長さ4.45メートル、東西4.14メートル、深さは1.2メートルである。

埋葬主体は掘り方のほぼ中央に置かれているが、主軸線はN-10°-Wで若干磁化からふれている。周堀から掘り方までの距離は2.24メートルである。

埋葬主体は組立式箱式石棺で、長さ3.0メートル、巾1.05メートル、深さ1.0メートルで雲母片岩の板石を玄室両側壁に各3枚、前室に質の石材を1枚ないし2枚、小口は南北共に1枚用いて組立てている。板石の大きさは縦1.0メートル、横0.47メートル、厚さ0.1メートル～0.2メートルで、ローム層(地山)を0.2メートルほど掘り下げて石をたててつくっている。前室及び玄室とも礫を地中上に敷詰めていることは第8号古墳と同様であるが、前室の底部の深さは0.7メートルで、玄室の底部より0.3メートル高い。また前室の側壁は西側ではなく、東側壁は玄室側が1枚失なわれている。遺物は発見されていない。

この古墳中の2基の方墳は、南北に長方形をなし、堅穴式石室状の箱式石棺がおかれであったが、埋葬主体部と周堀との間には狭道ないしは墓道と考えられる設備はほどこされていない。(第10図)

B 西方地区の古墳

この古墳群には2基の方墳が存在する。慈教堂古墳に対比される方墳である。こ

の2基の古墳は詳しく述べる必要がある。この古墳群はA、石倉山古墳群の西方住居地区内にあり、ドンドン塚古墳（3号墳）を含めて3基から成立っている。方墳は1、2の号から出来ている。

第1号古墳

この古墳の位置する地域は、鳥山丘陵の北側に延びる台地上にある。1号墳及び2号墳とも墳丘はなかったが、発掘前のみでなく、造成当初からなかったものと考えられる。主軸をほぼ南北に、東西に長い矩形を呈している。法量は南北11メートル、東西13.7メートルである。周溝は断面が逆台形を呈する。

埋葬施設は箱式石棺と考えられるが、石棺の一部と考えられる板石1枚が検出されたのと、石棺の下に敷詰めたと思われるバラス状石敷が発見されている。掘り方は周囲内のほぼ中央に、巾1.9メートル、奥行2.9メートル、深さ1.1メートルで、垂直に地山に切り込まれている。石棺は主軸を南北に向けておかれたと思われるが、床面に敷かれたバラス状石材と堀り方等から推定して全長2.1メートル、巾1.0メートルと推定される。

石棺の南面は土括が切れ、周溝にT字形に直交する巾1.3メートル、長さ2.5メートルの前道がある。いわゆる墓道と考えられるが、追葬のためのものか、排水溝かは即断できないと述べられている。

遺物は前道から出土した須恵器がある。長頸の壺形土器で、頸部と底部のみであるが、約2メートル離れて発見されている。暗褐色を呈し、全体にすりへった状態で、口縁部と胴部を欠き、底部は高台付で径7.7センチメートルである。（第11図）

第2号古墳

1号墳の南方約20メートル距てて発見された。調査地区D4、5 E4、5地区内の17、23、26号居住地の3軒を切って構築されている。「周溝墓」の遺構確認中、須恵器の出土によるもので、周溝調査の後、主体部を発見した。

墳丘が発掘当初からなかったことは1号墳と同様であった。周溝の巾は1.5メートル、底部の巾0.8メートル、逆台形を呈している。

周溝の内側は東西13.4メートル、南北13.5メートルで、ほぼ正方形に近い。

埋葬施設

周溝の南壁のほぼ中央から掘り込まれ、主軸線上に構築された箱式石棺である。石棺は盜掘のため失なわれてないが、掘り方の巾2.1メートル、長さ3.2メートル

で、その内側に巾1.4メートル、長さ2.6メートルの石棺の棺材を掘り込んだ遺構が発見された他、棺の下にバラスが敷詰められてある。石棺から南に前道が周堀にかけて設けられていることは前述のとおりである。前道の巾は1.0メートル、長さ3メートル、旧ロームを1メートル掘り構築され、ゆるやかに周堀に連絡している。

出土遺物

南周溝部前道両側から須恵器長頸壺と同質の壺が発見された。

須恵器長頸壺は周溝内の底部から発見されたが口縁部を東にむけ倒れた状態で出土した。高さ2.5センチメートル、口縁部の径11センチメートル、高台付の壺で、薄鼠色を呈している。胸部には平行クロ族が見られる。(第12図)

(3) 土浦市永国寺家の後・13塚日遺跡

つい最近、茨城県教育財團によって発掘調査された遺跡で、土浦市と桜村(つくば市)との境界近くにある。

遺跡は霞ヶ浦側から北に向って入りくむ谷に西面する台地上に當まれ、4基の方墳が発見されている。いづれも東西14.5メートル、南北15.5メートルないし16.5メートル、周堀の巾1.4メートル、底の巾0.9メートル、深さ0.5メートル前後の規模をもつが、中には封土を伴うものもある。この方墳は南北が東西に比して若干長い。

埋葬主体の掘り方は周堀南中央、主軸線上にあり、周堀内側から北に2.2メートルから4.8メートルにあり、掘り方の巾は2.2メートルである。掘り方の中央に石棺が置かれたと考えられる痕跡が認められる。痕跡は長さ4.45メートル、巾は2.55メートルである。

掘り方から周堀までの間には墓道ないし羨道と思われる施設がある。長さ4.0メートル、巾は掘り方付け根で1.8メートル、中央部で1.8メートル、周堀との接点部で2.48メートル、底部では堀り方付け根で1.8メートル、中央部で1.0メートル、周堀との接点部で1.5メートルである。

墓道の底は掘り方及び周堀方が低く、墓道中央が高いことから、埋葬主体底部から周堀にかけて排水の用は足せず、墓道は排水については形式化していることがわかるが、このことは他の3基についても同様である。(第13図)

慈教堂古墳の復元

慈教堂古墳は今回の発掘調査によって、はからずも潤沼川下流域における唯一の方墳であることがわかった。

実測による方墳の大きさは南北10.50メートル、東西10.50メートル、高さ1.225メートルの正方形の方墳で、南中央に墓道を持つ長さ1.75メートル、巾1.05メートル、深さ1.75メートルの粘板岩製の板石を組合せた箱式石棺を有する古墳であった。方墳の四周には上巾1.75メートル、底部の巾1.05メートル、深さ0.75メートルの周堀をもつている。(第14図)

この構造は基本的には0.35メートルを1尺とする高麗尺を用いて設計された古墳であると云えよう。

高麗尺は唐尺に先行して用いられた尺度であり、我が国では大阪・四天王寺の回廊が、高麗尺で東西径200尺、南北径284尺であること、また法隆寺東院伽藍の地割、南北廊、東西廊の梁間及び講堂の柱間、南門等にも見られるのであって、飛鳥時代の常用尺であった東魏尺(=高麗尺)が唐尺(曲尺)に先行して用いられた尺度であり、この古墳の地割が高麗尺の5尺を単位として造られていることを知るのである。このように本墳は飛鳥以降大宝令施行以前か、その前後に營まれた古墳としてよいであろう。

七浦市烏山遺跡の西方地区方墳の2例及び同市寺家の後・十三塚遺跡の4例がほぼ同時期のものであり、なお且つ本墳と比較する時、その墓道が退化しているのに対して、慈教堂古墳は一応排水の機能を有することは、本墳が少なくとも土浦の6例に先行する古墳であることを示していると見てよいであろう。

慈教堂古墳の營まれた長兎路の地は、府中(現石岡市)から安房駅家(西茨城郡岩間町安房)を経て河内駅家(水戸市渡里町)にいたる古街道の置かれた地であれば、この地を支配した豪族の存在が考えられる。高級官僚ではないにしても、それに次ぐ豪族が居住し、この地に葬られたということも考えられるのである。(第15図)

※ 追記

これらの他、方墳としては真壁郡関城町舟玉所在の国指定史跡・舟玉古墳も一辺35メートル、高さ約3メートルの方墳で、全長5.7メートルの横穴式石室をもつことが確認されているし、東茨城郡常澄村大六天・森戸古墳群中の大六天古墳も一辺16~17メートル、高さ

1.1メートル、墳丘中央部に滑石製勾玉1個が出土したといわれ、さらに鹿島郡鹿島町宮中野・宮中野古墳第99号古墳も一種の方墳で、東西22メートル、南北34メートル、高さ2.7メートル、南に開口する二基の横穴式石室がつくられているなど、数基の報告もある。

方墳の概念であるが、この報告では縦横の一辺の長さが等しい、いわゆる正方形を呈するものの他、縦横の一辺の長さの異なる矩形墳をも含めて方墳として捉えてきたが、厳密には正方形を呈するものを方墳とよぶべきであろう。

これはしばらくおくとして、全国的な方墳例をみても、その大きさ、内部構造についても種々の差異が認められ、同一ではない。今回報告した中でも、土浦市石倉山古墳の第8、9号古墳の例のごとく、堅穴式状組合せ石棺を埋葬主体とし、墓道または墓道を欠くものもあれば、水戸市所在の吉田古墳のように横穴式石室を有するものもある。

これらの例は慈教寺古墳とは明らかに異なるものであると考える。慈教寺古墳の営まれた時期の方墳として、慈教寺古墳と同一のタイプとは、少なくとも一辺の長さが10~20メートル前後で、高さ1~3メートル前後、高麗尺を基準とした古墳ということになる。終末期の古墳として位置付けられる古墳である。

県内の方墳については小室勉氏の「常陸の古墳時代」昭和14年10月、同「前方後円墳の終焉と方墳」(大森信英先生還暦記念論文集「常陸國風土記と考古学」所収、同先生刊行会昭和60.4.雄山閣)がある。

最後に全国の方墳のうちで7世紀に位置づけているいくつかの古墳名を挙げておく。

讃岐 角塚

播磨 若狭野

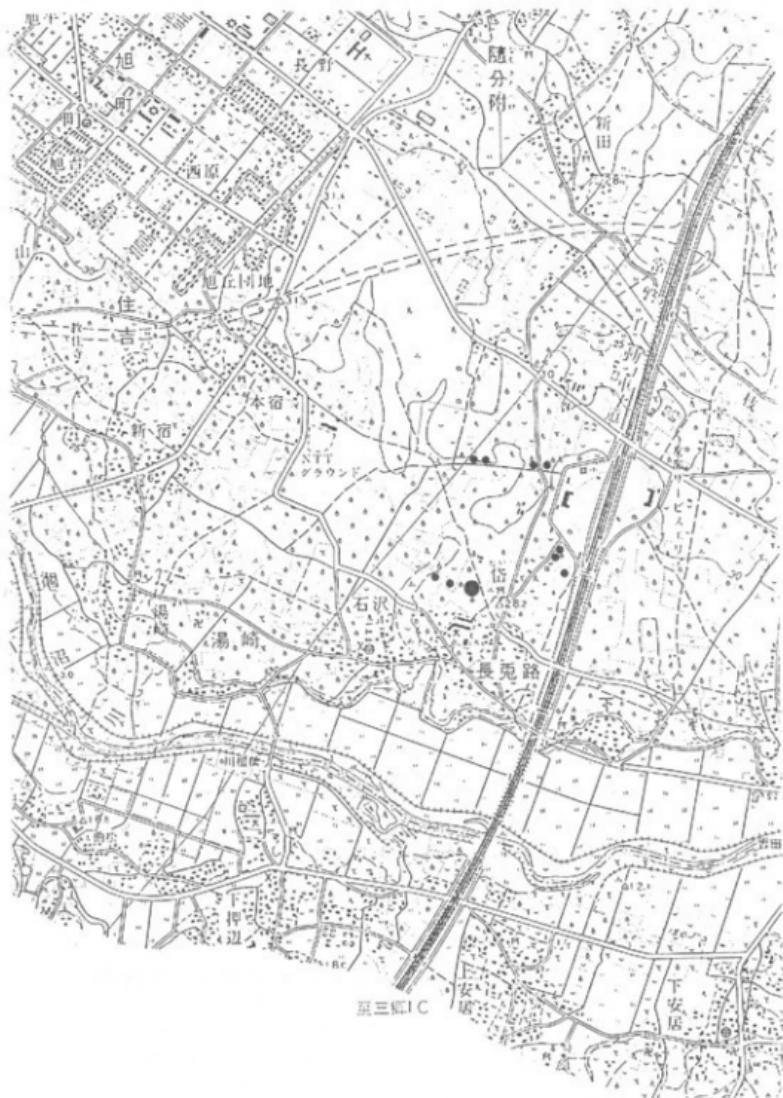
但馬 コウモリ塚、長者ヶ平2号

攝津 初田1号、阿武山古墳、塚原N2号

大和 石舞台古墳、都塚古墳、岩屋山古墳、鳥谷口古墳、仏塚古墳、西宮古墳、塚平古墳、草墓

武藏 茶臼山古墳、地蔵塚古墳

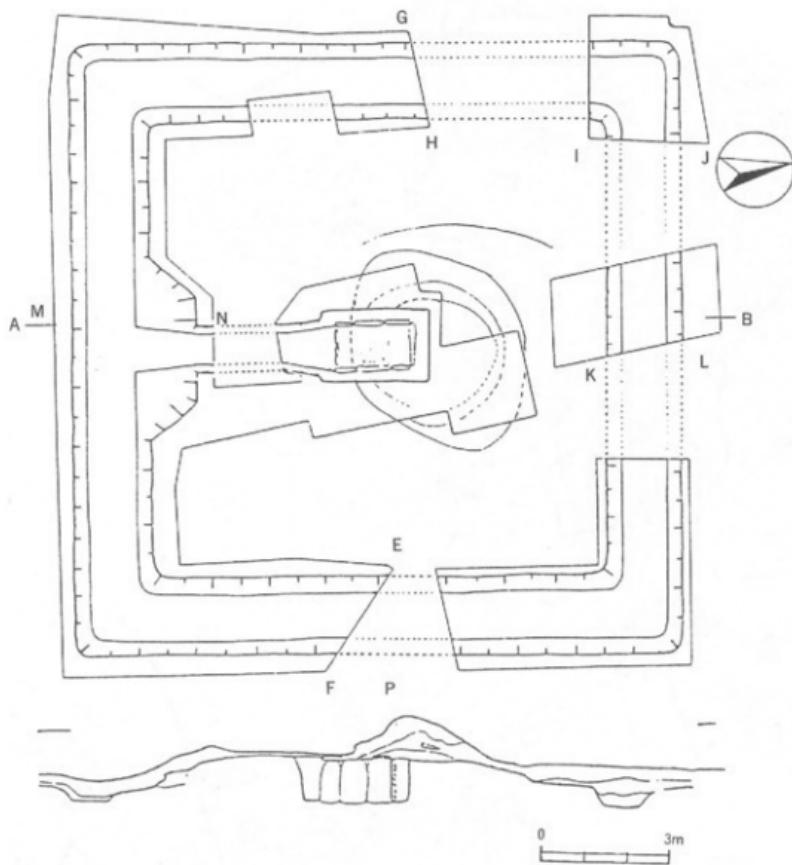
房総 剖見塚古墳、亀塚古墳、森山塚古墳、野々間古墳、岩屋古墳



第1図 慶教堂古墳位置図

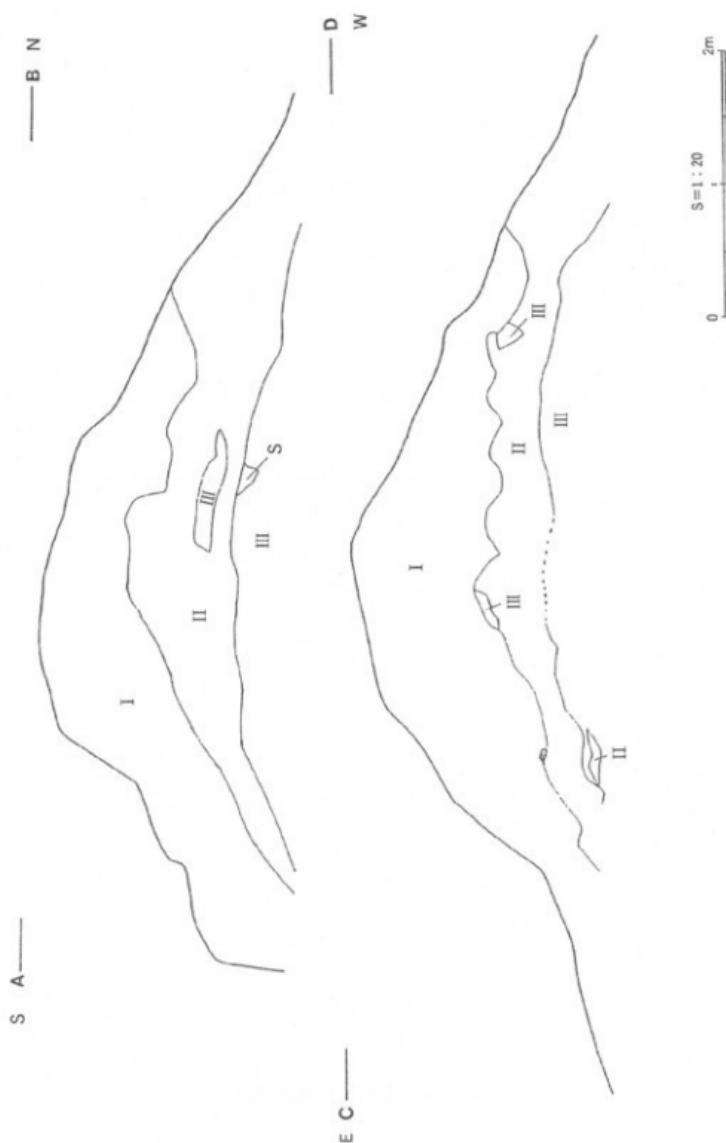


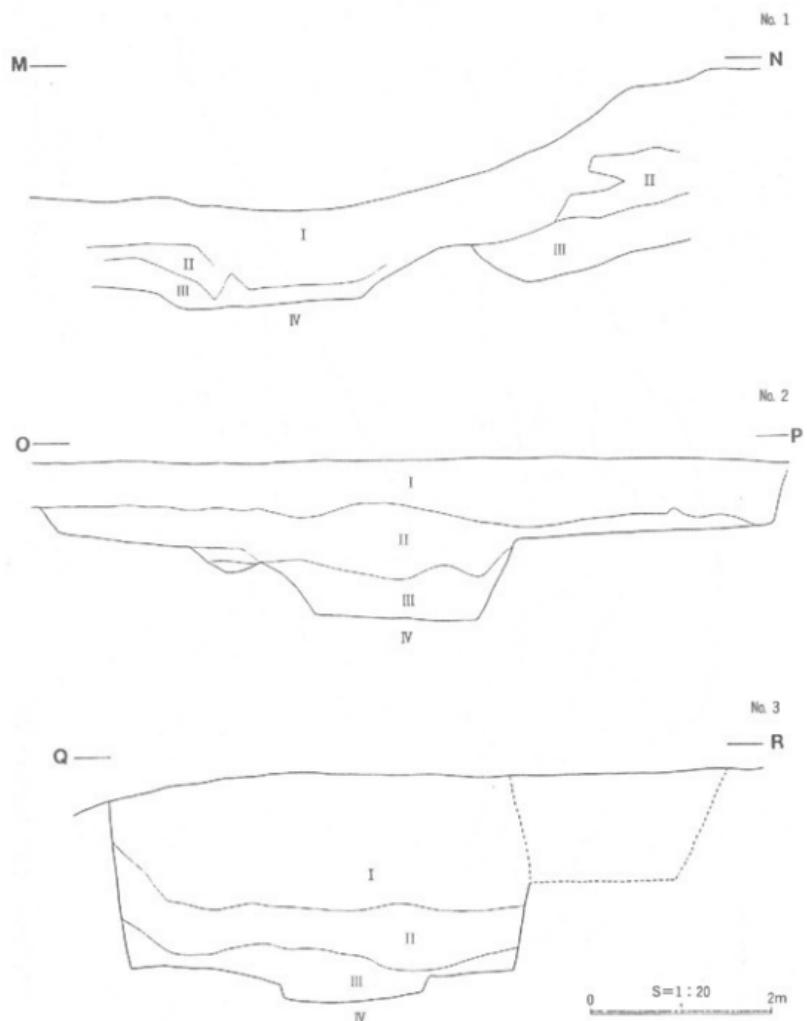
第2図 友部町遺跡分布図



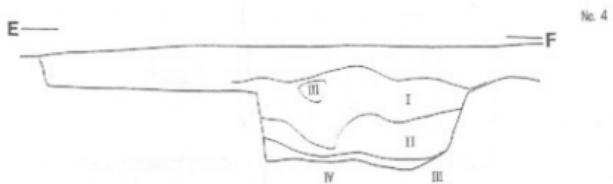
第3図－1 慈教堂古墳実測図

第3圖—2 慈教堂古墳壙丘斷面圖





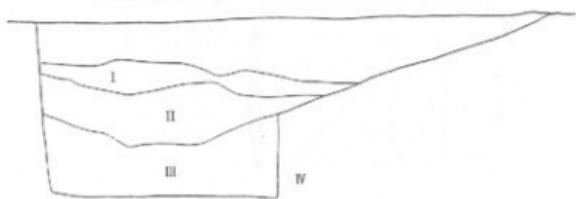
第3図-3 墳丘及び周堀断面図



東側トレンチ西側セクション

No. 5

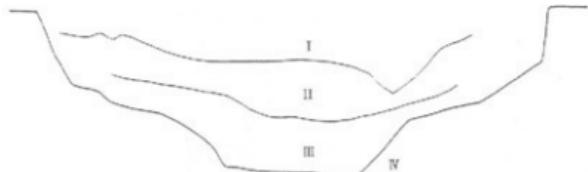
G ————— H



北西側トレンチ南セクション

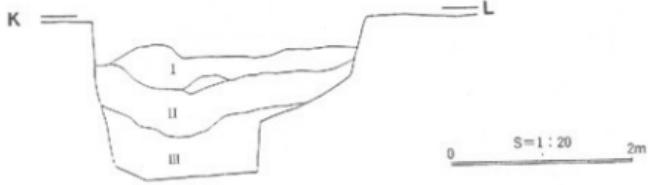
No. 6

I ————— J



北側トレンチ東セクション(北西寄り)

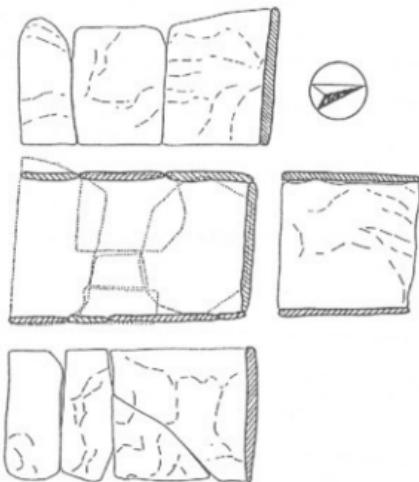
No. 7



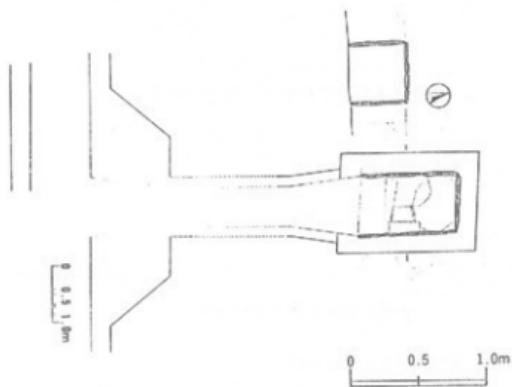
北側トレンチ東セクション

I 表土 II 暗褐色土 III 黄褐色土 IV ローム

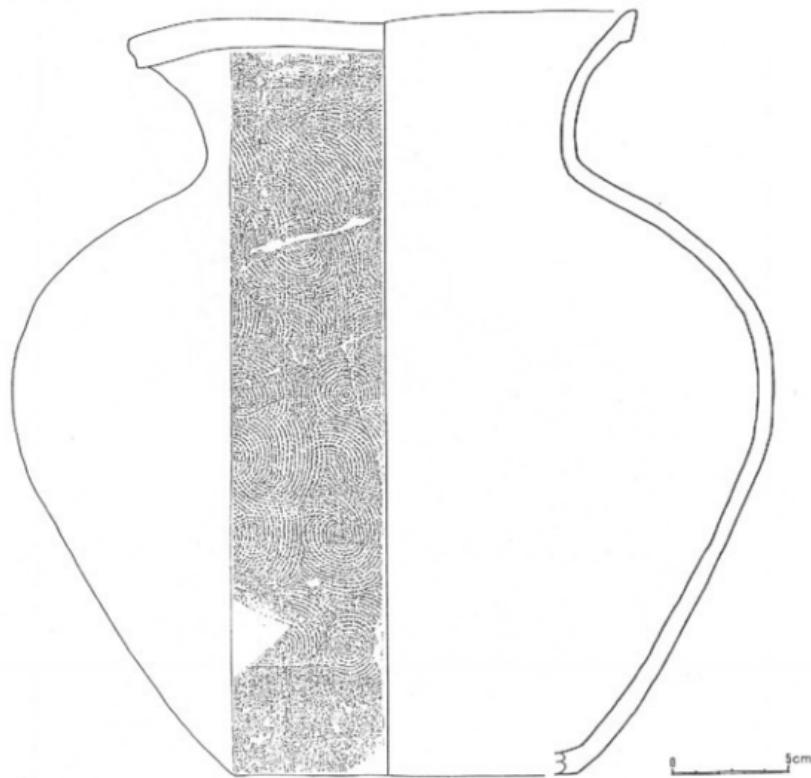
第3図-4 周堀断面図



第4図一(1) 慈教堂古墳石室実測図 (1)



第4図一(2) 慈教堂古墳石室実測図 (2)

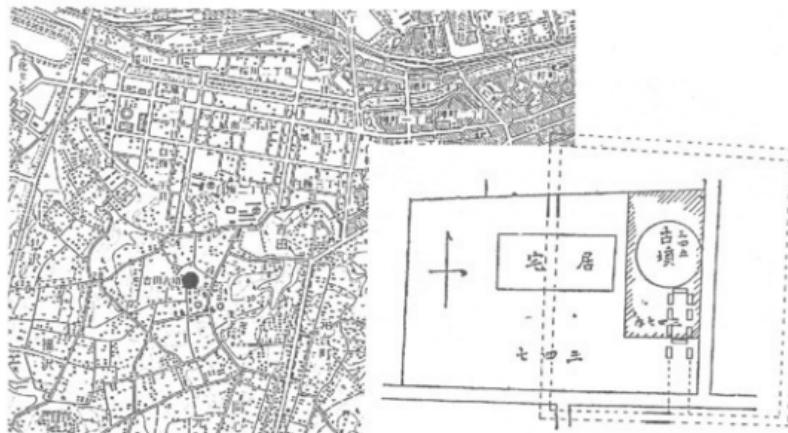


第5図 慶教堂古墳出土 須恵器壺実測図



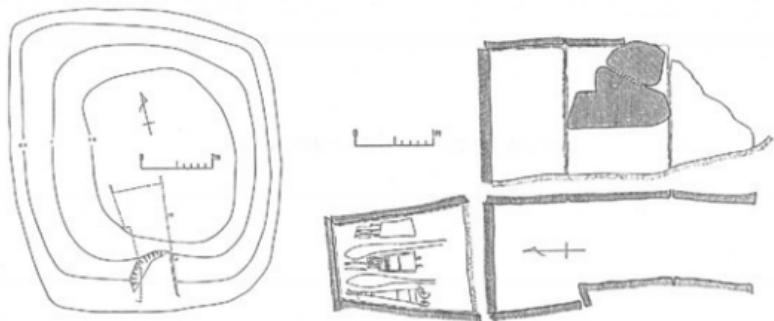
第6図 茨城県方墳分布図 茨城県古墳地名表による（昭34）

資料出所 茨城県教育庁



吉田古墳位置図

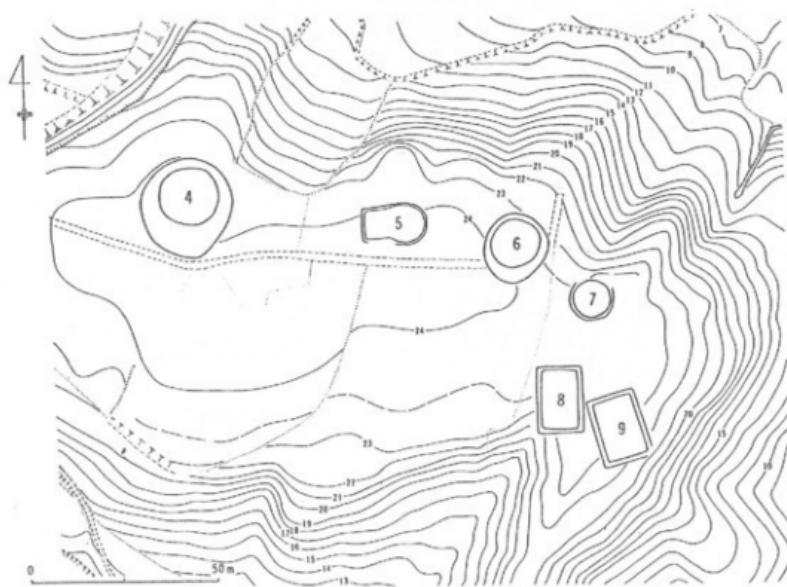
吉田古墳地域図
(点線周堀)



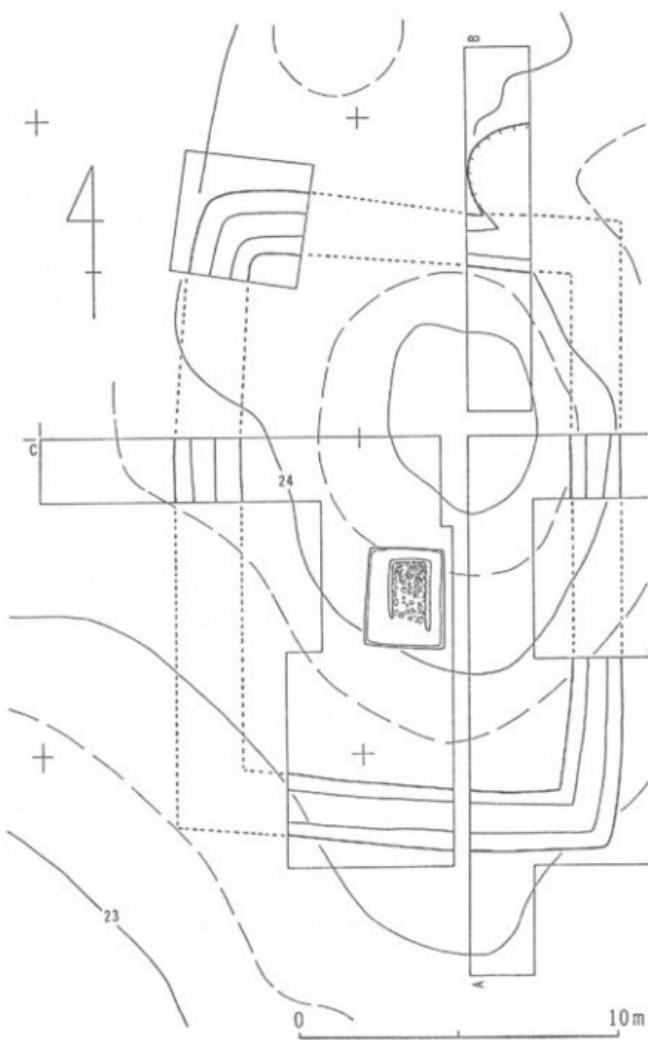
吉田古墳実測図
(「茨城県史料考古史料編」より)

吉田古墳石室実測図
(「茨城県史料考古史料編」より)

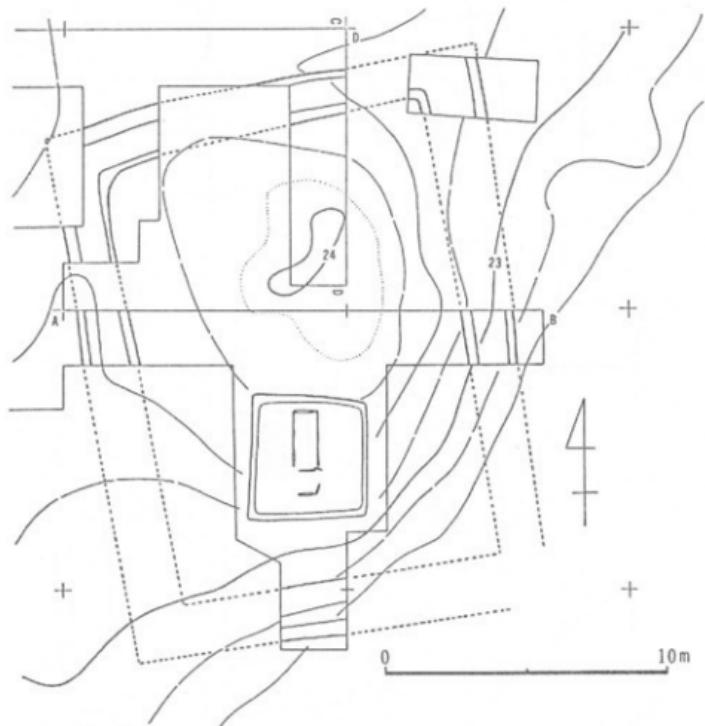
第7図



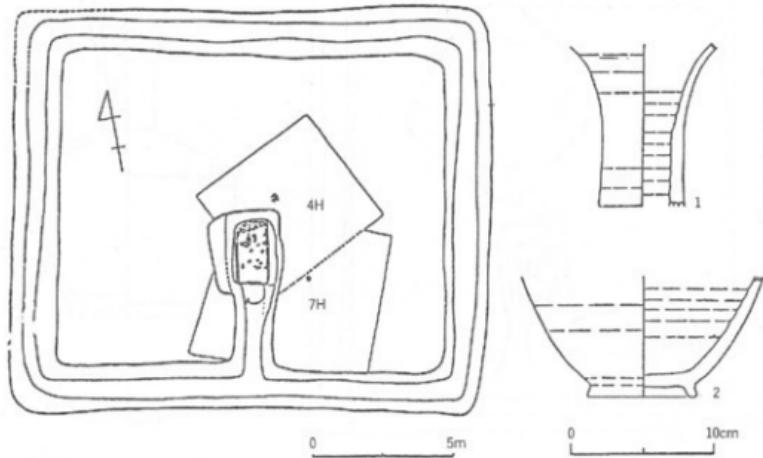
第8図 土浦・烏山古墳群位置図(石倉山)



第9図 烏山・石倉山第8号古墳実測図



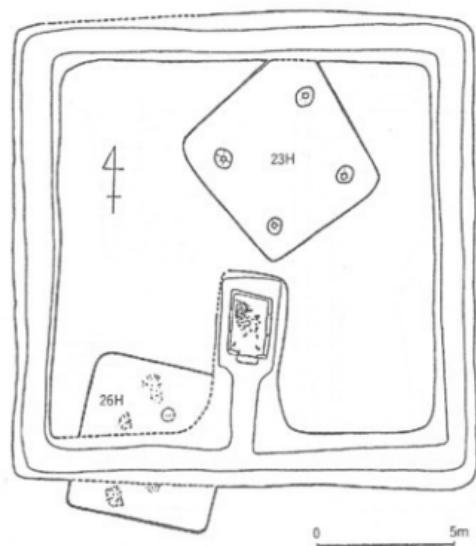
第10図 烏山・石倉山第9号古墳実測図



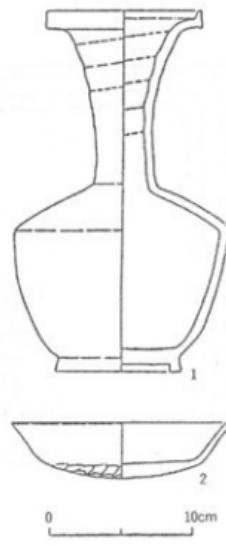
1号古墳実測図

1号墳出土長頸壺

第11図 西方地区の古墳、1号古墳実測図
及び出土遺物

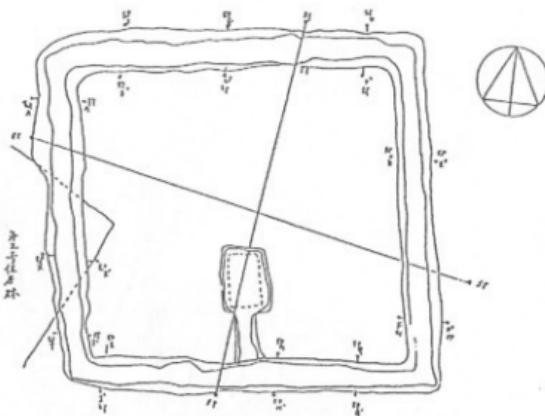


2号墳実測図

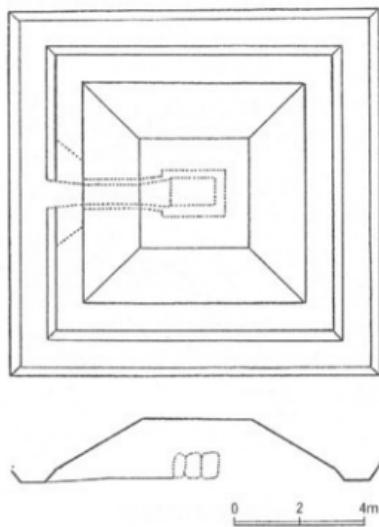


2号墳出土長頸壺・杯

第12図 西方地区の古墳、2号古墳実測図及び出土遺物



第13図 土浦市永国・寺家の後第2号古墳



第14図 慈教堂古墳復元実測図

延喜年間之圖



第15図 延喜年間之圖



発掘前の慈教堂古墳全景（東から）



同上 （西から）

図版一 2



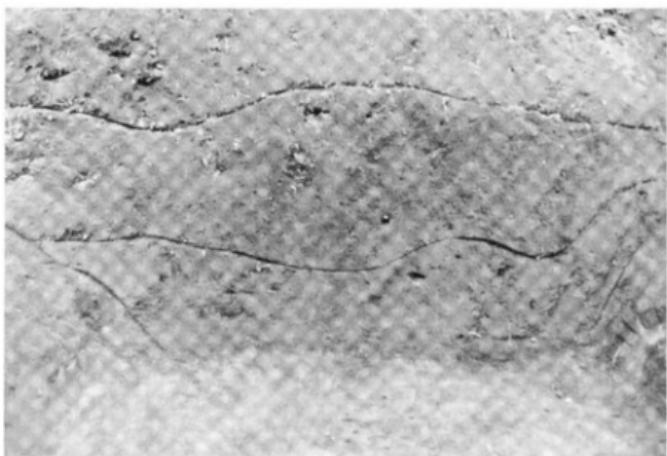
発掘中の墳丘（石棺の上部が露出した状態）西南側から撮影



発掘中の墳丘、南側から北半を撮影



発掘中の墳丘（東から南半を撮影）



周堀の断面

図版一 4



発掘後の石棺全影 東側から撮影



発掘後の石棺全影 西側から撮影



発掘後の石棺全景（南側から撮影）



同上（北側から撮影）

図版一 6



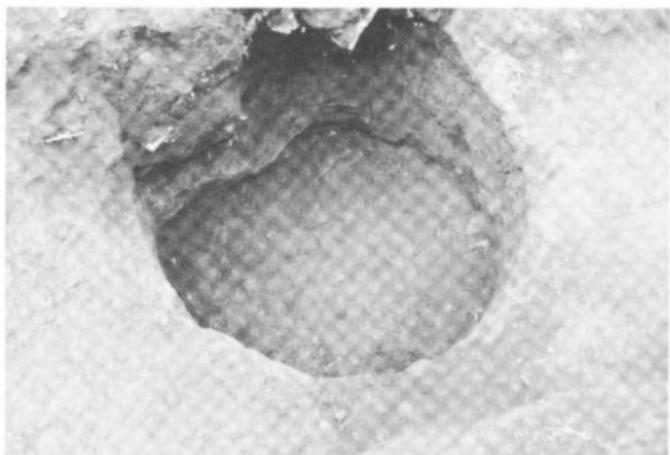
石室



吉田古墳全景（東方より）



古墳出土の須恵器壺

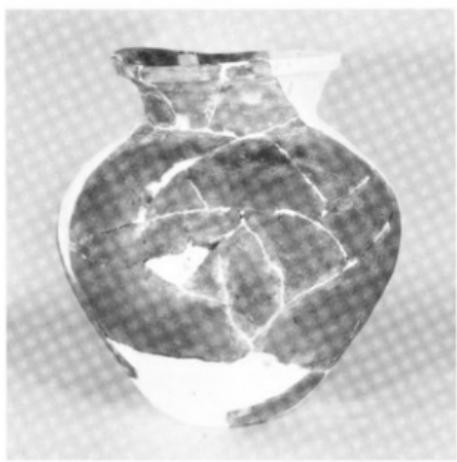


須恵器壺の発掘跡

図版一 8



慈教堂古墳復元全景 南側から撮影



須恵器壺

慈教堂古墳発掘調査報告書

平成2年3月25日 印刷

平成2年3月31日 発行

編集 慈教堂古墳発掘調査会
発行 友部町教育委員会
印刷 佐藤印刷株式会社
TEL 0292-51-1212

